

中国人日本語学習者の比較副詞 「もっと」の誤用とその原因

渡 邊 ゆかり

Misuse of Japanese Comparative Adverb “*Motto*” by
Chinese Learners of Japanese and Its Causes

WATANABE Yukari

要 旨

比較副詞「もっと」については、これまで日本語における類義語との比較や日本語学習者の母語における類義語との比較がなされ、その結果、比較副詞「もっと」とその類義語の意味・用法の相違が明らかとなってきた。しかしながら、日本語学習者が「もっと」を習得する過程においてどのような種類の誤用が発生するのか、その原因は何かについては十分に明らかにされてはいない。そこで、本研究では中国語を母語とする日本語学習者を対象に、学習者の日本語作文中に見られる「もっと」の誤用とその原因を分析した。その結果、中国語母語話者の「もっと」の誤用には「学習者の母語における『もっと』の類義語の意味・用法の転用」だけでなく、「日本語の学習過程において類義語との意味・用法の相違を学ぶ機会が乏しいこと」も大きく関与していることが明らかとなった。

キーワード：「もっと」、 「さらに」、 「より」、 中国人日本語学習者、 誤用

1. は じ め に

程度副詞の体系化を試みた渡辺（1990）は、程度副詞「もっと」が比較構文「XはYより―」に立つことから、これを比較系の副詞に分類した。この比較と関わる副詞（以下、比較副詞と称する）「もっと」については、これまで、日本語における類義語との比較や日本語学習者の母語における類義語との比較がなされてきた。その結果、「もっと」とその類義語の意味・用法の相違が明らかとなってきた。

しかしながら、日本語学習者が「もっと」を習得する過程においてどのような種類の誤用が発生するのか、その原因は何かについては十分に明らかにされてはいない。

そこで、本研究では、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国人日本語学習者と称する）を対象に、学習者の日本語作文中に見られる「もっと」の誤用とその原因を分析する。

2. 先行研究

ここでは、本研究と関わる先行研究として以下の種類の先行研究を見ていく。

- ①「もっと」の主体的意義に言及しているもの (2.1)
- ②「もっと」とその類義語との意味・用法の相違に言及しているもの (2.2-2.5)
- ③「もっと」と中国語「更」との意味・用法の相違に言及しているもの (2.6)

2.1 「もっと」の主体的意義

渡辺 (1985) は、「もっと」を「対象的意義を表わしながら、併せて主体的意義を表わし、それ故に主体的意義が目立たぬ語 (p.66)」の1例と捉え、「Xは Yより もっと Aだ」における「もっと」の主体的意義について以下のような言及を行っている。

「もっと」の場合、(中略)「YモAニハ違イナイガ、十分ニAデハナイ」という評価が下されている、と認めるべきであろう。ホボ十分ニAdealと話者が認めるのはXの方であって、Yはその不十分さによってXを引き立てる媒体なのである。(中略)以上のことを項目Aに焦点をあてて言い直すなら、Aに立つ語は、Yには不十分にしか当てはまらない、と話者に評価された内容に限られる、という評価的条件が作用している、ということになるだろう (p.69)。

渡辺のこの視点は、以降の研究ではあまり着目されなくなるが、「もっと」とその類義語を比較する上での重要な視点と言えよう¹。

2.2 「もっと」と「ずっと」

「もっと」と「ずっと」の相違に言及した研究のうち代表的なものとしては、佐野 (1998) が挙げられる。佐野は、比較副詞を「もっと」類、「ずっと」類、「多少」類の三つに分類し、「もっと」類と「ずっと」類の相違を「前提と含意」「修飾の在り方」の2点から分析した。その結果は以下の通りである (cf. 佐野 pp.12-13)。

①前提と含意について

「もっと」類…「YもAである」という前提を必要とする。(ただし、「もっと」が「否定的用法」となる場合は前提を必要としない)。

「ずっと」類…前提を必要とせず、また含意も持たない。

②修飾のあり方について

「もっと」類…XとYの「客観的な関係」を表す。

「ずっと」類…XとYの程度性が大きいことを話者の「主観的な評価」として述べる。

まず、佐野が①の「YもAである」という前提の有無の根拠としたのは、次の(1)–(3)である。

- (1) a. 太郎と次郎とどちらのほうが背が高いですか。(佐野の(9a))
- b. 太郎のほうが{ずっと/??もっと}高いです。(佐野の(9b))
- (2) a. 太郎と次郎とどちらのほうが背が高いですか。(佐野の(9'a))
- b. 次郎も高いですが, 太郎のほうがもっと高いです。(佐野の(9'a))
- (3) a. 太郎と次郎とどちらのほうが背が高いですか。(佐野の(9" a))
- b. ?? 次郎は低いので, 太郎のほうがもっと高いです。(佐野の(9" a))

佐野は、(1b)で「もっと」が不自然であるのは、「YもAである」という前提が得られないためであるとし、「YもAである」という前提を加えると、(2b)のように「もっと」が自然になるとしている。また、Yの状態に関する前提が存在しても、「YがAでない」という前提の場合は、(3b)のように「もっと」が不自然になるとしている。さらに、①の「ただし、『もっと』が『否定的用法』となる場合は前提を必要としない」の根拠としたのは、次の(4)–(7)である。

- (4) 私が言っているのは {もっと/*更に/*非常に/*多少/*ずっと} 別の問題だ。(佐野の(18))
- (5) a. 彼は160センチですか。(佐野の(20a))
- b. いいえ。{もっと/*更に/*非常に/*多少/*ずっと} 高いですよ。(佐野の(20b))
- (6) もっと早く走れ。(佐野の(21))
- (7) この店の料理は昔はもっとおいしかった(のに、今はおいしくない)。(佐野の(24))

佐野は、このような否定的用法について、「話題になっているY、或いは現状を否定し、Xはそれ以外であること、或いはそれ以上であるということを述べるものであり、『もっと』類のうち『もっと』に限ってこの『否定的用法』を持つ(p.5)」としている²。

次に、佐野が②の修飾の在り方の違いの根拠としたのは、次の(8)–(10)である。

- (8) ([太郎190^{センチ}・次郎188^{センチ}のとき])
- 太郎は次郎より {もっと/更に/一層} 背が高い。(佐野の(50))
- (9) ([太郎190^{センチ}・次郎188^{センチ}のとき])
- ?? 太郎は次郎より {ずっと/はるかに/断然} 背が高い。(佐野の(51))
- (10) ([太郎190^{センチ}・次郎160^{センチ}のとき])

太郎は次郎より {ずっと/はるかに/断然} 背が高い。(佐野の (51'))

佐野は、「ずっと」類は、(10)のようにXとYの幅が大きく開いている場合に用いられるとしている。

この他、佐野は、比較マーカースとの共起関係についても調査しており、「ずっと」は比較対象が明らかであっても「～より」「～の方が」「～に比べると」といった比較マーカースが明示されなければ用いることができないことを指摘している。

2.3 「もっと」と「さらに」

「もっと」と「さらに」の相違に言及した研究としては、佐野、林(2000)、候(2002)が挙げられる。このうち、佐野は、「さらに」が「もっと」と同様、「YもAである」という前提を持つことから「さらに」を「もっと」類に含めた。ただし、「もっと」が「YもAである」という前提を持たない否定的用法を持つのに対し、「さらに」は、このような否定的用法を持たないと見ている(cf.本稿(4)(5))。この点について、林、候もほぼ同様の見解を示している。

また、「さらに」と比較マーカースとの共起関係については、佐野、林は「もっと」と同様に「さらに」を比較マーカースが明示されなくても用いることができるものに位置づけている(cf.佐野 pp. 11-12, 林 p. 2)。

2.4 「もっと」と「より」

「もっと」と「より」の相違に言及した研究としては、木下(2001)が挙げられる。木下は、「もっと」と「より」の相違について以下のように述べた。

「もっと」が口語的であるのに対し「より」は文章語的であるが、両者は口語表現か文章表現かによって単純に入れ替え可能なものではない。「もっと」は心理的に近くに捉えられた対象を基準とする比較であるのに対し、「より」は比較対象は特定される必要はなく、比較の向きを示す矢印は話し手が現在位置する視点を起点としない(p. 20)。

木下がこの根拠としたのは、次の(11)–(13)である。

(11) 人々は {もっと/より} 豊かな暮らしを求めている。(木下の(12))

(12) 人は {?もっと/より} 豊かな暮らしを求めるものだ。(木下の(14))

(13) {もっと/*より} 大きいのはありませんか。(木下の(15a))

木下は、(11)において「もっと」は比較の基準が現状であると解釈されるが、「より」は比較の基準を特定しないまま解釈されると述べている。また、(12)で「もっと」の容認度が低いのは、(12)の文が「人」の一般的特徴を表しており、現状という特定の状態を基準にすることが本来の特徴を述べることに反するからであると考えた。さらに、これとは逆に(13)で「より」

が使えないのは、現在・現実・現場の状態が比較の基準であると解釈されなければならないためであると考えた。

この他、木下は、次の(14)を根拠に、『もっと』を使用するためには基準となる状態について前もって言及されている必要がある(p.22)が「より」はこの必要がないとしている。

(14) a. 太郎と次郎とどちらの方が背が高いですか。(木下の(23A))

b. 太郎のほうが{?? もっと/より} 高いです。(木下の(23B))

また、「より」と比較マーカ－との共起関係については、安達(2001)が「副詞『より』は、構文的な環境や文脈によって潜在的に比較の意味が存在するとき、これを明示化する機能を持つ(p.17)」と述べている。このことは、「より」が「比較マーカ－」との共起を必要条件としていないことを意味する。

2.5 先行研究から見えてくる「もっと」「ずっと」「さらに」「より」の相違

ここまで見てきた先行研究に基づき、比較副詞としての「もっと」「ずっと」「さらに」「より」の相違をまとめると、表1のようになる。なお「もっと」については、「YもAである」という前提・含意を持つ「もっと1」とこの前提・含意を持たない否定的用法の「もっと2」を分けて記載した。

表1 比較副詞「もっと1」「もっと2」「ずっと」「さらに」「より」の相違

	もっと1	もっと2	ずっと	さらに	より
話題のYや現状を否定する用法	無	有	無	無	無
「YもAである」という前提・含意	有	無	無	有	無
比較マーカ－	必ずしも必要ではない	不要	必要	必ずしも必要ではない	必ずしも必要ではない
比較基準の特定性	心理的に近くに捉えられている特定のものや時間	心理的に近くに捉えられている特定のものや時間	-	-	不特定
主体的意義	比較基準Yの程度に対し不十分と評価	比較基準Yの程度に対し不十分と評価	Xと比較基準Yとの差を強調	-	-

表1より、これらの副詞は、互いに共通する特徴を多く有しているものの、すべての特徴が完全に一致するペアは存在しないことがわかる。ここまで、「もっと」を中心にこれと意味・用法の類似する日本語の比較副詞とを比較してきた。次の2.6では、「もっと」と意味・用法が類似する中国語の「更」とを比較している先行研究を取り上げる。

2.6 「もっと」と中国語の「更」

章・水野 (1984) は、「もっと」と中国語の「更」を語法と意味の二つの側面から比較した。

まず、語法については、「もっと」は、形容詞、動詞だけでなく、方向を表す名詞も修飾できるが、「更」は、形容詞と動詞を修飾するだけであり、動詞を修飾する場合も「もっと」より制限されるとした。章・水野が、根拠としたのは、以下の (15) - (17) である。

(15) a. もっと右。(章・水野の (13))

b. *更右边。(章・水野の (14))

(16) a. おかしをもっとください。(章・水野の (9))

b. *请更给我来点点心。(章・水野の (10))

(17) a. 隊長は、危険であると判断して、もっと後退するように命じた。(章・水野の (11))

b. *队长看出了危险, 命令更后退。(章・水野の (12))

次に、意味については、「更」は、比較対象の程度が、標準的な値もしくは標準的な値を超えた値を基準としてこれを上回る場合にしか用いられないが、「もっと」は、標準的な値に達しない値を基準としてこれより上回る場合にも用いられるとした³。次の (18) (19) は、章・水野がその根拠とした例である。

(18) a. お金もだいじだが、もっとたいせつなものは時間だ。(章・水野の (22))

b. 钱是重要的, 可是更重要的是时间。(章・水野の (23))

(19) a. 昨日買ったシャツは小さすぎたので、もっと大きいのに代えてもらった。(章・水野の (15))

b. *昨天买的衬衫太小了, 今天换了件更大的。(章・水野の (16))

(18) は、比較対象の「時間」の重要性について、標準値を基準としてそれより程度が上回ることを表しており、「もっと」も「更」も可能である。しかし、(19) は、「シャツ」の大きさについて標準値を下回る値を基準にそれより程度が上回ることを表しており、「もっと」は可能であるが「更」は使えない。

また、章・水野は、「もっと」と「更」の意味の相違の二つ目として、「更」は、「元々ある程度そうである」という含意を伴って用いられることがあるのに対し、「もっと」はこのような含意が明確でないとした。章・水野が根拠としたのは、中国人日本語学習者が日本語作文で書いた次の (20) (21) とこれらを中国語に訳した (22) (23) である。

(20) 小雨が山野を潤し、草木の緑はもっとあざやかになった。(章・水野の (1))

(21) 北国の春にはもっと神秘的な魅力があり、それが私をひきつける。(章・水野の (2))

(22) 细雨润湿了山野, 草木更绿色了。(章・水野の (3))

(23) 北方的春天有着更神秘的魅力, 它深深地吸引着我。(章・水野の (4))

章・水野が13名の日本人教師に、(20) (21)における「もっと」の自然さを尋ねたところ、成立すると回答した者の数は、いずれも半数以下であった。一方、14名の中国人の友人に(22) (23)の自然さを尋ねたところ、(22)は13名が成立すると回答し、(23)は14名が成立すると回答したとのことである。

章・水野は、さらに、「更」が「反而」「倒」を伴う場合は、次の(24) (25)のように反対方向の程度を比較することもあるとしている。

(24) 反而更快了。(章・水野 p. 39)

(25) 这一来倒更坏了。(章・水野 p. 39)

章・水野は、(24)の場合、元々は必ずしも速くなく、遅かった可能性があり、(25)の場合、元々は必ずしも悪くなく、良かった可能性があるとしている⁴。

以上が、章・水野の分析の骨子である。本節で取り上げた先行研究からは、「もっと」と「更」の相違について以下のことが言える。

「もっと」と「更」のいずれも、程度の方向性が同じもの同士の比較に使用できるほか、程度の方向性が異なるもの同士の比較にも使用できる。ただし、いずれの場合においても語法面や前提・含意の面で相違がある。前提・含意の面のみに着目すると、程度の方向性が同じもの同士の比較の場合、「もっと」は、「YがAである」程度に対する書き手(話し手)の不十分という評価を含意する。一方、「更」は、往々にして「元々ある程度そうである」という前提・含意を持つ。また、程度の方向性が異なるもの同士の比較の場合にも「もっと」は、「YがAである」程度に対する書き手(話し手)の不十分という評価を含意する。一方、「更」は、「元々はそうではない」という前提・含意を持つ。

以上本節では、本研究と関わる先行研究について見てきた。次節では、本研究の調査方法について記述する。

3. 調査方法

3.1 調査の種類と調査対象

本研究では、以下に述べる2種類の調査を通し、中国人日本語学習者の日本語作文中に見られる「もっと」の誤用とその原因を明らかにする。

一つは、日本語のテキストや教師用参考書で「もっと」とその類義語「ずっと」「さらに」「より」がどのように扱われているかについての調査である。これはテキストや教師用参考書の扱われ方も誤用の原因の一つになりうる可能性があるからである。対象としたテキストは、日本国内の日本語学校でよく使用される①-⑧と、中国人日本語学習者用に光村図書が中国の人民

教育出版社と共同で編集した⑨-⑪である。

- ①『みんなの日本語初級Ⅰ 第2版』スリーエーネットワーク, 2012
- ②『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版』スリーエーネットワーク, 2013
- ③『中級へ行こう 第2版』スリーエーネットワーク, 2016
- ④『中級を学ぼう 中級前期 第2版』スリーエーネットワーク, 2019
- ⑤『中級を学ぼう 中級中期』スリーエーネットワーク, 2009
- ⑥『できる日本語初級』アルク, 2011
- ⑦『できる日本語初中級』アルク, 2012
- ⑧『できる日本語中級』アルク, 2013
- ⑨『新版標準日本語初級上・下 (第2版)』アスク, 2013
- ⑩『新版標準日本語中級上・下 (第2版)』アスク, 2014
- ⑪『新版標準日本語高級上・下 (第2版)』アスク, 2012

また、対象とした教師用参考書は、以下の①②である。

- ①『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク, 2000
- ②『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク, 2001

もう一つの調査は、中国人日本語学習者が書いた日本語作文中の「もっと」の誤用調査である。本調査では、次の①-③の三つのコーパスを使用した。

- ①JCK 作文コーパス⁵
- ②日本語学習者作文コーパス⁶
- ③学習者作文コーパスなたね⁷

3.2 本研究で扱う誤用の種類

『新版日本語教育事典』(p. 698)によれば、誤用には段階(程度)があり、文法的な正確さに関わるものと文章・談話としての適切性に関わるものの二つの方向から捉えることができる。本研究においても、この二つの方向性から誤用を分析する。また、同書(p. 698)では、誤用を大きく、①脱落、②付加、③誤形成、④混同、⑤位置、⑥その他に分類している。本研究では、「もっと」「ずっと」「より」「さらに」がすでに用いられている文を対象に自然さを判断することから、①脱落と③誤形成は調査対象から除き、②付加、④混同、⑤位置、⑥その他(ただし、①脱落③誤形成を除く)の観点から誤用を分析する。

3.3 誤用の判定方法

学習者の日本語文には、今回分析対象とする「もっと」以外の誤用も含まれている。そこで、

まず、「もっと」以外の不自然な表現を自然な表現に修正し、その後、修正文の中で用いられている「もっと」の自然さを判定する。

3.4 誤用の分析方法

抽出した誤用例を誤用の種類ごとに分類した後、不自然さの原因ならびに誤用を生み出す要因について分析する。

以上本節では、本研究で用いる調査方法について記述した。次節からは本調査結果について記述する。

4. 日本語テキストにおける「もっと」とその類義語

3.1で示した調査対象の日本語テキストにおいて、「もっと」「ずっと」「さらに」「より」がどの段階で用いられているか、どのような文に現れているかを調べたところ、結果は以下の通りであった。なお、ここでは累加の接続詞としての「さらに」は含めていない。

A. スリーエーネットワークのテキスト

『みんなの日本語初級Ⅰ第2版』『みんなの日本語初級Ⅱ第2版』

L12 (例文) ニューヨークは 大阪より 寒いですか。

…ええ、ずっと 寒いです。

L35 (例文) 日本の生活はどうですか。

…とても便利です。でも、もう少し物価が安ければ、もっといいと思います。

L35 (会話) タワポン：そうですか。どちらが 安いですか。

鈴木 : さあ…。旅行社へ 行けば もっと詳しい ことが わかりますよ。

L35 (練習) 毎日 日本語で 話せば、もっと 上手に なります。

『中級を学ぼう中級前期第2版』

L7 (本文) しかし、強くなってくると、相撲が面白くなる。面白いから、さらに稽古を重ねる。

L7 (聞こう) 職人の世界は長くて厳しい修行を重ねなければ、(a.) になれない。すし職人の場合、最低でも (b.) は修行が必要である。カウンターでお客様の注文を受けて、すしを握るのにさらに (c.) がかかるようだ。

『中級を学ぼう中級中期』

L3 (読み物) 今回の調査から、学生だった当時も制服を好きだったという人が多かったのですが、学校を卒業した後で振り返ってみたときのほうが、さらにより印象を持っていることがわかりました。

B. アルクのテキスト

『できる日本語初中級』

L2 (言ってみよう) A: ああ、この電子辞書は画面が小さいですから、ちょっとみにくいです。

B: そうですね。小さすぎますね。

A: もっと画面が大きいのがいいです。

『できる日本語中級』

L7 (読もう) 例のように出身が近いなどの共通の何かがあればより親しくなれるだろう。

C. アスクのテキスト

『新版標準日本語初級上下 (第2版)』

L12 (基本课文) 甲: 北京は 東京より 寒いですか。

乙: ええ 冬の 北京は 東京より ずっと 寒いです。

L12 (語法解説) 中国は 日本より ずっと 広いです。(中国比日本辽阔得多。)⁸

L18 (表达及词语讲解) 間もなく タイムサービスの 時間です。さらにお安くします。
(时段廉价销售时间马上就要到了, 价钱会更加便宜。)

L18 (表达及词语讲解) 今から7時まで もっと 安く なります。(从现在开始到七点, 商品会更加便宜。)⁹

『新版標準日本語高級・上下』

L5 (練習8) 開催のテーマは「よりよい都市, よりよい生活」で、(开办的主题为“城市, 让生活更美好”)

次の表2は、A, B, Cのテキストにおける各形式の導入順序をまとめたものである。なお、「もっと1」は「YもAである」という前提・含意を持つものを、「もっと2」はこの前提・含意を持たない否定的用法を示すものとする。

表2 日本語テキスト中の比較副詞「もっと」「ずっと」「さらに」「より」の導入順序

	A. スリーエー	B. アルク	C. アスク
初級	ずっと⇒もっと1		ずっと⇒さらに・もっと1
中級	さらに	もっと2⇒より	
上級			より

表2が示すように、3系統のテキストのいずれにも登場する形式は「もっと」だけだが、いずれのテキストにおいても扱われる用法は2種類のうちのいずれか一方であり、テキスト間での一致も見られなかった。また「もっと1」が登場するA、Cでは、「ずっと」が「もっと1」に先行していた。

5. 教師用参考書における「もっと」とその類義語の取り扱い

まず『初級を教える人のための日本語ハンドブック』では、「もっと」と「ずっと」の相違について、「もっと」は、AもBも～だが、Aのほうがより～である場合にもっぱら用い、「ずっと」は、単にAとBの差が大きいことを示すとしている（cf.『初級を教える人のための日本語ハンドブック』p. 172）。

次に『中上級を教える人のための日本語ハンドブック』では、「もっと」と「さらに」の相違についての言及はなく、いずれも「AもBもPであるがその2者を比べたらAのほうがよりPである場合」に用いるとしている（cf.『中上級を教える人のための日本語ハンドブック』pp. 199-200）。

また「もっと」と「より」の相違については、「より」は比較の意味は表されるものの、必ずしもはっきりした比較の相手がなくても使えるが、「もっと」の場合は、特定の比較相手がなければ使えないとしている（cf.『中上級を教える人のための日本語ハンドブック』pp. 200-201）。

これらの記述から、今回調査した教師用参考書では「YもAである」という前提・含意を持つ「もっと1」については説明がなされているが、この前提・含意を持たない否定的用法の「もっと2」については説明がなされていないことがわかる。また、「もっと」と「ずっと」、「もっと」と「より」の相違については説明されているが、「もっと」と「さらに」については共通点を挙げるのみにとどまり、相違について説明されていないことがわかる。

以上、4節、本節では、日本語テキストならびに教師用参考書において「もっと」とその類義語との意味・用法の相違についてどのように取り上げられているかを見てきた。次節では、中国人日本語学習者の日本語作文中における「もっと」の誤用についての調査結果を記述する。

6. 中国人日本語学習者の日本語作文中における「もっと」の誤用

6.1 誤用の種類

3.1で挙げた3種類のコーパスから収集した「もっと」の用例は135例である。135例の内訳は、「JCK作文コーパス」（以下JCKと称す）の例が54例、「日本語学習者作文コーパス」（以下

日本語学習者と称す)の例が44例,「学習者作文コーパスなたね」(以下なたねと称す)の例が37例である。なお「もっともっと」のように「もっと」の重ね形については,1例としてカウントした。「もっと」の正用数,種類別に見た誤用数は以下の表3の通りである。

表3 「もっと」の正用数と種類別に見た誤用数

正用	誤用			
	付加	他形式との混同	不適切な位置	その他 (脱落, 誤形成を除く)
106	0	19	2	8
79%	0%	14%	1%	6%

表3より,誤用の中で最も多い種類は「他形式との混同」であることがわかる。

次の6.2からは,これらの誤用の具体例を種類ごとに見ていく。

6.2 他形式との混同

6.2.1 他形式との混同の下位類

「他形式との混同」の例は,19例存在した。ただし,ここでは,学習者が「もっと」よりも自然な形式を知らない,もしくは,忘れたために「もっと」を使用した可能性があるものも含めている。「もっと」より自然な代替形式は,表4の通りである。

表4 「もっと」よりも自然な代替形式

代替形式		数
A. 比較基準を表す連用句	名詞+より(もっと)	1
B. 比較基準を表す連用句/比較副詞	以前より(もっと)/より	2
C. 比較副詞	より	9
	さらに	1
D. 程度副詞	とりわけ/ことに	1
E. 比較副詞+形容詞の連用形	より深く	3
	より多く	1
F. 接続詞	さらに	1

表4より,「もっと」よりも自然な代替形式には「より」を構成要素とするもの(表4のA, B, Cの「より」, E)が比較的多いことがわかる。

次にそれぞれの具体例を見ていく。なお,「もっと」を使用した用例を挙げる時は,「もっと」

以外の不自然な表現が「もっと」の自然さの判定に影響しないよう、「もっと」以外の不自然な表現を稿者が修正したものを挙げる。また、「もっと」以外の不自然な表現を修正した場合は、修正前の用例も、() 書きで添える。これ以降も、学習者の誤用を挙げるときは、このような記載方法を用いることとする。

6. 2. 2 A. 比較基準を表す連用句

代替表現として「A. 比較基準を表す連用句」を用いた方がより自然な例は次の(26)である。

(26) a. ?勉強を通して、炭焼きは作り方からほかのコーヒーと違って伝統的な焙煎方法を改良した全く新しい品種であることを知った。その味は、もっと苦いけど、少しも渋くない。

(勉強を通して、炭焼きは作り方からほかのコーヒーと違って伝統の焙じる方法を改良した完全新しい品種だそうだ。その味はもっと苦いけど、少しも渋くない。(JCK, c54-3))

b. 勉強を通して、炭焼きは作り方からほかのコーヒーと違って伝統的な焙煎方法を改良した全く新しい品種であることを知った。その味は、ほかのコーヒーより(もっと)苦いけど、少しも渋くない。

(26) の比較基準は、「ほかのコーヒー」であり、「もっと」の代わりに「ほかのコーヒーより」を入れると容認度が上がる。また、「ほかのコーヒーより」の後に「もっと」を付加することも可能である。

6. 2. 3 B. 比較基準を表す連用句／比較副詞

代替表現として「B. 比較基準を表す連用句／比較副詞」を用いた方がより自然な例としては次の(27)を挙げることができる。

(27) a. ?日本語を勉強する前、日本と言えば、ただ漠然とした印象しかなかった。(中略) 彼らの中国と中国人への愛情に感心せざるを得ない。そして、私は中日両国民の友情をもっと深く認識するようになった。(なたね, 027_a)

b. 日本語を勉強する前、日本と言えば、ただ漠然とした印象しかなかった。(中略) 彼らの中国と中国人への愛情に感心せざるを得ない。そして、私は中日両国民の友情を {以前より(もっと)/より} 深く認識するようになった。

(27) の比較基準は、「以前」であり、「もっと」の代わりに「以前より」を入れると容認度が上がる。また、「以前より」の後に「もっと」を付加することも可能である。さらに、「もっと」の代わりに比較副詞の「より」を用いても容認度が上がる。

6. 2. 4 C. 比較副詞

代替表現として「C. 比較副詞」を用いた方がより自然な例としては次の (28) (29) が挙げられる。

(28) a. ? 実は、日本語がうまくなる方法はいっぱいある。でも、どの方法がいいかは人によって違う。もっとか**っ**つな人は直接自分の国以外の人に話しかける。

(実は、日本語がうまくなったの方法がいっぱいある。でも、どの方法は人々によって間違いである。もっとか**っ**つな人は直接に自分の国以外話しかける。(日本語学習者, CN321))

b. 実は、日本語がうまくなる方法はいっぱいある。でも、どの方法がいいかは人によって違う。よりか**っ**つな人は直接自分の国以外の人に話しかける。

(29) a. ? それから、鉄道が多くなるにつれて、ところによっていろいろな『駅弁』がうられるようになりました。(中略) ほかに、『雪人弁当』とか、『イカ飯』とか、『鰻飯』といったような地元の特色を持っている駅弁がたくさんあります。第二次世界大戦後も、旅行が発展するにつれて、駅弁の種類がもっと多くなりました。

(それから、鉄道が多くなるにつれて、ところによっていろいろな『駅弁』がうりました。(中略) ほかに、『雪人弁当』とか、『イカ飯』とか、『鰻飯』といったような元地の特色を持っている駅弁がたくさんあります。第二次世界大戦の後で、旅行の発展するにつれて、駅弁の種類がもっと多くなってきました。(なたね, 037_a))

b. それから、鉄道が多くなるにつれて、ところによっていろいろな『駅弁』がうられるようになりました。(中略) ほかに、『雪人弁当』とか、『イカ飯』とか、『鰻飯』といったような地元の特色を持っている駅弁がたくさんあります。第二次世界大戦の後も、旅行が発展するにつれて、駅弁の種類がさらに多くなりました。

まず (28) の比較基準は、相対的に活発でない不特定多数の人たちにあたり、「もっと」の代わりに「より」を入れると容認度が上がる。次に (29) の比較基準は、「旅行が発展する前」にあたり、「もっと」の代わりに「さらに」を入れると容認度が上がる。

6. 2. 5 D. 程度副詞

代替表現として「D. 程度副詞」を用いた方がより自然な例は次の (30) である。

(30) a. ? 自分独自の方法でかつて助けられた船家の一家を、影でできるだけサポートした。自分が恩返しのために来たのを知らせないで、そのままずっと努力していた。彼の復讐はもっと徹底的だった。

(自分の独特の方式でかつて、助けられてた船家の一家に、できるだけ、黙ってサポートして、でも、自分が恩返しのために来たのを知らせないで、そのままずっと努力していた。彼の復讐はもっと徹底的に暴いていた。(JCK, c42-3))

- b. 自分独自の方法でかつて助けられた船家の一家を、影でできるだけサポートした。自分が恩返しのために来たのを知らせないで、そのままずっと努力していた。彼の復讐は とりわけ/ことに 徹底的だった。

(30) の比較基準は作文の書き手が考える標準的な程度であり、「もっと」を「とりわけ」「ことに」に代えると容認度が上がる。

6. 2. 6 E. 比較副詞+形容詞の連用形

代替表現として「E. 比較副詞+形容詞の連用形」を用いた方がより自然な例としては次の(31) (32) が挙げられる。

- (31) a. ?心のこもったコーヒーを飲んで、みんなの真剣さと苦勞を味わった。もっと、人生のことを悟った。

(心を込めたコーヒーを飲んで、みんなの真剣さと苦勞さを味わった。もっと、人生のことを悟った。(JCK, c54-3))

- b. 心のこもったコーヒーを飲んで、みんなの真剣さと苦勞を味わった。より深く、人生のことを悟った。

- (32) a. ?昔より今の人たちは欲しいものが多くなり、もう気楽な生活を満足するだけではなく、精神や時間などの自由を得たいと思うようになった。莫大な社会の圧力によって、もっとの責任に縛られたくないと思うようになった。

(昔より今の人間は欲しかったものは多くなって、もう気楽な生活を満足するだけではなく、精神や時間などの自由も得たい。莫大な社会の圧力でもっとの責任に縛られたくない。(JCK, c16-2))

- b. 昔より今の人たちは欲しいものが多くなり、もう気楽な生活を満足するだけではなく、精神や時間などの自由を得たいと思うようになった。莫大な社会の圧力によって、より多くの責任に縛られたくないと思うようになった。

(31) の比較基準は「心のこもったコーヒーを飲む前」であり、「もっと」は「悟る」という心的動作の程度について言及するために使用されている。ここでは「もっと」を「より深く」に代えると容認度が上がる。(32) の比較基準は「莫大な社会の圧力がない場合」であり、「もっと」は責任の量や重さを形容するために使用されている。ここでは、「もっと」を「より多く」に代えると容認度が上がる。

6.2.7 F. 接続詞

代替表現として「F. 接続詞」を用いた方が自然な例は次の (33) である。

(33) a. *ひらがなは、日本人が自分で作った文字であるのに対し、漢字は中国の古代の文字からできたものである。もっと近代に入って、英語の影響を受け、カタカナで表記される外来語も作られた。

(ひらがなは、日本人自分で作った文字としてのにひきかえ、漢字は中国の古代の文字を勉強してできたものである。もっと近代に入って、英語の影響を受けとって、カタカナで表記した外来語もできた。(なたね, 108_a))

b. ひらがなは、日本人が自分で作った文字であるのに対し、漢字は中国の古代の文字からできたものである。さらに近代に入って、英語の影響を受け、カタカナで表記される外来語も作られた。

「もっと」は、接続詞としての機能を持たない。ここでは、「もっと」を累加の接続詞「さらに」に代えることで容認可能となる。

6.3 不適切な位置

「不適切な位置」の例は表3に示したように1例のみであった。次の(34)がこれにあたる。

(34) a. *私はあきらめない。もっと将来私の外国語はうまくなるだろう。

(私はあきらめない。もっと将来私の外国語はだんだんうまくなるう。(日本語学習者, CG028))

b. 私はあきらめない。将来私の外国語はもっとうまくなるだろう。

(34) では、被修飾形容詞「うまく」の直前に「もっと」を移動することで容認可能となる。

6.4 その他 (脱落, 誤形成を除く)

「その他 (脱落, 語形成を除く)」には、表5に示した種類の誤用が存在した。

表5 その他 (脱落, 誤形成を除く) の誤用の種類

誤用の種類	数
A. 比較対象の後に付く「(の) 方が」 ¹⁰ の欠如	6
B. 比較基準の後に付く「より」の欠如	1
C. 「もっと」が修飾する程度副詞の欠如	1

A-Cのいずれも、「もっと」を用いた比較構文を支える文法要素の欠如による誤用である。それぞれの具体例は以下の通りである。なお、これらの例においては、「もっと」を用いた比

較構文を支える文法要素が欠如している部分以外で不自然な表現を修正した例を a に挙げ、その下に修正前の例を () 書きで記載する。

A. 「(の) 方が」の欠如

(35) a. *今の若者たちは、結婚して、家庭に束縛されるより、自分で生活して、個人の自由な生活をするのがもっといいと思っている。

(今の若者たちは、結婚して、家庭に束縛されるより、自分で生活して、個人の自由な生活をするのはもっといいと思っている。(JCK, c15-2))

b. 今の若者たちは、結婚して、家庭に束縛されるより、自分で生活して、個人の自由な生活をする方がもっといいと思っている。

B. 「より」の欠如

(36) a. *人は年を取り、父と母も年を取ると、将来自分のもっと年をとった両親をそばで見守る可能性があるから、

(人は若くない年齢になると、父と母も年を取ると、未来は一人での老人が自分のもっと若くない両親をそばにいて看観することの可能性があるので、(JCK, c26-2))

b. 人は年を取り、父と母も年を取ると、将来自分よりもっと年をとった両親をそばで見守る可能性があるから、

C. 程度副詞の欠如

(37) a. ?機会があればもう一度行ってみたい。そして、より多くの地方へ旅をしたい。もっと撮影して写真作家になりたいと思っている。

(機会があればもう一度行ってみたいんだ。そして、より多くの地方へ旅をしたい。もっと撮影して写真作家になりたいと思っている。(JCK, c43-3))

b. 機会があればもう一度行ってみたい。そして、より多くの地方へ旅をしたい。もっとたくさん撮影して写真作家になりたいと思っている。

以上、本節では、中国人日本語学習者の日本語作文中に見られる「もっと」の誤用にどのようなものがあるかを見てきた。次節では、このような誤用例について不自然さの原因を解明する。

7. 不自然さの原因

前節で見たように、最も生じやすい誤用の種類は「他形式との混同」である (cf. 本稿の表 3)。ただし、この種類の誤用には「代替した方が望ましい形式の意味や用法を正しく習得して

いない場合」だけでなく、「代替した方が望ましい形式そのものが未習得の場合」や「代替した方が望ましい形式を忘れた場合」も含めている。

この種類の誤用において、代替が望ましい形式として最も出現頻度が高かったのは比較副詞「より」である。

2節で取り上げた先行研究によれば、この比較副詞「より」は、次の3点が「もっと」と異なる。

- ①「もっと」は否定的用法を持つが「より」は否定的用法を持たない。
- ②「もっと」の比較基準は、心理的に近くに捉えられている特定のものや時間だが、「より」の比較基準は、不特定である。
- ③「もっと」は比較基準Yの程度に対する書き手（話し手）の不十分という評価があるが、「より」にはこのような評価は存在しない。

代替表現として「より」が望ましかった「もっと」の誤用例は、いずれもこれらの②、③に関わるものであった。すなわち、心理的に近くに捉えられている特定のものや時間が先行文脈に存在しない場合、もしくは、比較基準の程度に対する書き手の不十分という評価を文脈的に認めにくい場合である。

例えば、(27)の比較基準は、「以前」であるが、文脈中にこの比較基準は明示されていない。すなわち、この比較基準はあらかじめ心理的に近くに捉えられてはいない。そのため、「もっと」は不自然となる。一方「より」は特に比較基準が心理的に特定されている必要はないので自然である。また、(28)の比較基準は、相対的に活発でないと捉えられる不特定多数の人たちにあたるが、文脈中にこの比較基準は明示されていない。すなわち、あらかじめこの比較基準が心理的に近くに捉えられていない。また、この比較基準そのものも、不特定であり特定されていない。そのため「もっと」は不自然となる。一方「より」は特に比較基準が心理的に特定されている必要がないので自然である。

次に、代替が望ましい形式として出現頻度が2番目に高かったのは「より深く」である。「より深く」の方が自然な例において「もっと」は心的動作を表す動詞「信じる」「悟る」「理解する」を修飾するのに使用されていた。やはり、これらの例でも文脈的に比較基準が心理的に近くに捉えられておらず、そのことが「もっと」の不自然さの要因と考えられる。また、「より」は「もっと」とは異なり直接動詞を修飾することができない。そのため、「より」と形容詞「深く」を結合した「より深く」に代替すると自然になる。

続いて、代替が望ましい形式として出現頻度が3番目に高かったのは、「名詞+より」と「以前より」である。これらにおいても「もっと」の不自然さは、文脈的に比較基準が心理的に近くに捉えられていないことに起因している。したがって「名詞+より」「以前より」を入れると

比較基準が明確になり、「もっと」の使用も自然となる。

例えば、(27)は「以前より」という表現を入れれば、「以前」という特定の比較基準が心理的に近くに捉えられるので「もっと」が自然となる。ただし、この場合は「もっと」は必須というわけではなく、「以前より」だけでも自然である。

最後に、代替が望ましい形式として出現頻度が4番目に高かったのは、比較副詞「さらに」、程度副詞「とりわけ/ことに」、接続詞「さらに」である。いずれも1例ではあるが、誤用の要因はこれまで見てきたものと通じるものがある。

一つ目の比較副詞「さらに」が代替形式として望ましい(29)では、文脈的には特定の比較基準として「第二次世界大戦以前」が心理的に近くに捉えられている。ただし、文脈的に第二次世界大戦以前の駅弁の豊富さに対し書き手が不十分という評価をしているとは捉えがたい。むしろ、書き手は第二次世界大戦以前の駅弁の豊富さも高く評価している。そのため、もともと高い評価をしており、加えて高い評価を示すときに使う「さらに」が代替形式として望ましかったのだと考えられる。

二つ目の程度副詞「とりわけ/ことに」が代替形式として望ましい(30)では、文脈的に特定の比較基準が心理的に近くに捉えられていない。また(30)の比較基準は書き手が考える「復讐」に関する標準的、あるいは一般的な程度である。比較基準が書き手の価値尺度の標準値に相当するため比較副詞ではなく程度副詞の方が自然である。

三つ目の接続詞「さらに」が代替形式として望ましい(31)については、そもそも「もっと」には接続詞としての用法がない。にもかかわらず、このような誤用が見られたのは、「もっと」が比較副詞「さらに」と類義関係にあり、比較副詞「さらに」が接続詞「さらに」と派生関係にあることに起因すると考えられる。

ここまで、「もっと」の誤用のうち「他形式との混同」に分類されるものの特徴を見てきた。「もっと」の誤用で次に多かった種類は「その他(脱落, 語形成を除く)」である。中でも「もっと」を用いた比較構文を支える文法要素の一つ「(の)方が」の欠如が目立っていた。「(の)方が」は「もっと」を用いる比較構文に必ず必要なわけではなく、比較対象の一方にあたる主格が格助詞「が」を伴って焦点化されている時に必要となる。したがって、この種類の誤用では比較対象の一方にあたる主格が焦点化されているにもかかわらず、「(の)方が」が用いられていないため不自然となっている。

以上、本節では「もっと」の誤用のうち相対的に頻度が高い種類について誤用の原因を分析してきた。次節では、中国人日本語学習者がこのような誤用を生み出してしまう要因について考察する。

8. 誤用を生み出す要因

表3に示したように誤用の種類では「他形式との混同」に分類されるものが最も多く、表4に示したように「他形式との混同」の中では、代替形式として比較副詞「より」が望ましい例が目立つ。

この「より」は、今回調査した日本語テキストのうち、アルクのテキストとアスクのテキストでは扱われていたが、スリーエーネットワークのテキストでは扱われていなかった。

また「より」が扱われているこれら2系統のテキストでは「より」は中級以降の学習項目に含まれていた。

さらに、「YもAである」という前提・含意を持つ「もっと1」と「より」が共に学習項目に含まれていたのは、アスクのテキストのみであり、「もっと1」は初級の学習項目、「より」は上級の学習項目であった。

これらのことから、学習者は学習過程において日本語テキストを通し「もっと1」と「より」を比較して捉える機会に乏しいことがうかがえる。このことも、「もっと」の誤用を生み出す要因の一つと捉えることができる。

また、5節で見たように、今回調査した教師用参考書では「もっと」と「さらに」の相違についての言及はなく、「もっと」に比較基準に対する書き手（話し手）の不十分という評価が含まれていることについての言及もなかった。「もっと」の意味に含まれるこのようなネガティブな評価と食い違う内容が先行文脈に記載されていた場合は、「もっと」は不自然となる。したがって「もっと」の意味に「比較基準に対する書き手（話し手）の不十分という評価」が含まれていることを意識できる日本語テキストや教師用参考書が存在しないことも、「もっと」の誤用を生み出す要因の一つとして捉えることができる。

最後の要因として取り上げるのは、母語の干渉である。「もっと」は中国語の「更」に対応するものとして取り上げられることが少なくないが、両者の意味は完全に一致はしていない。章・水野が指摘したように、中国語の「更」には、「もともとある程度そうである」という含意を伴って用いられることがある。そのため、このような意味の「更」を「もっと」に置き換えた日本語文を作成すると不自然となる。(26a)の「もっと」の不自然さはまさにこのことと関わっていると考えられる。

また、比較副詞として用いられる中国語の「更」には、「比較基準に対する書き手（話し手）の不十分という評価」は含まれていない。そのため、学習者が「もっと」を「比較基準に対する書き手（話し手）の不十分という評価」が含まれていないものとして使用することも十分に

想定される。

仮に先行文脈にこのようなネガティブな評価と食い違う内容が認められれば、学習者が使用した「もっと」は日本語母語話者にとっては不自然に感じられるであろう。しかし、先行文脈にこのような評価と食い違う内容が認められない場合には、書き手（話し手）が実際に「比較基準に対する不十分という評価」を持っていたのか否かを確認できない。

例えば、「あなたの演奏はすばらしいが、彼の演奏はもっとすばらしかった」と述べたか「あなたの演奏はすばらしいが、彼の演奏はさらにすばらしかった」と述べたかで、「あなたの演奏」に対する書き手（話し手）の評価は微妙に異なる。前者では、書き手（話し手）は、「あなたの演奏」のすばらしさを認めつつも、十分ではないと捉えている。一方後者では、書き手（話し手）は「あなたの演奏」を十分にすばらしいものと評価している。しかし、日本語学習者が後者の意味を伝えるつもりで前者を生産する可能性は十分にありうる。

したがって、そのことで生まれる誤解を回避するためにも、中国人日本語学習者に「もっと」を導入する際には、中国語の「更」や将来的に学習することになるであろう「さらに」「より」との意味・用法の相違をあらかじめ意識した導入が求められる。また、比較副詞としての「さらに」「より」を新出単語として導入する際にも「もっと」との相違を意識できるような配慮が必要である。

9. お わ り に

本研究では、中国人日本語学習者の日本語作文中に見られる「もっと」の誤用とその原因を分析した。その結果、以下のことが明らかとなった。

- 相対的に「他形式との混同」に分類される誤用が多い。
- 「他形式との混同」の中では「より」に代えた方が望ましい例が相対的に多い。
- 日本語のテキストでは「もっと」と「より」を比較して捉える機会が乏しい。
- 教師用参考書には「もっと」に「比較基準に対する書き手（話し手）の不十分という評価」が含まれているという記述が存在しない。
- 中国語の「更」には、「比較基準に対する書き手（話し手）の不十分という評価」は含まれていない。

つまり、中国人日本語学習者の「もっと」の誤用には、「学習者の母語における『もっと』の類義語の意味・用法の転用」だけでなく「学習過程で『もっと』とその類義語との意味・用法の相違を学ぶ機会が乏しいこと」も大きく関与していると言える。

また、後者の要因については、他の言語を母語とする日本語学習者の「もっと」の誤用にも

多かれ少なかれ該当することが推測される。

したがって、「もっと」の誤用産出を抑えるためには、「もっと」を導入する際に類義語との意味・用法の相違を意識した導入を行うこと、「もっと」の類義語を導入する際には「もっと」とその類義語との意味・用法の相違を意識した導入を行うことが肝要である。加えて、教師用参考書においても「もっと」とその類義語との意味・用法の相違をより明確に把握できる記述が求められるであろう。

注

- 1 大島(1998)も、渡辺(1985)の見解を支持している。また大島は「もっと」には、YがXに及ばないことに対する話し手の不足感も含まれているとしている。(cf. 大島 p. 25)
- 2 また、林(2000)は、この否定的用法について、比較基準「Yより」が明示されないことによって、「もっと」の解釈が否定的用法に傾くとした。(cf. 林 p. 8)
- 3 この点については、大島(1998)でも、同様の見解が示されている。
- 4 時(1999)も、次の(i)「反而」を伴った並列比較において、「更」の反対方向の比較が成立するとしている。

(i) 昨天冷, 今天反而「更/*还」暖和。(昨日は寒かったが、今日は逆に暖かい) (時の(17))
- 5 「JCK 作文コーパス」は、<http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus> から利用可能である。日本語母語話者、中国語母語話者(JLPTのN1合格者およびこれに相当する学習者)、韓国語母語話者(JLPTのN1合格者およびこれに相当する学習者)による日本語作文が収録されている。
- 6 「日本語学習者作文コーパス」は、<http://sakubun.jpn.org> から利用可能である。「日本語学習者作文コーパス」には、中国語母語話者(初級から上級)と韓国語母語話者(初級から上級)の日本語作文が収録されている。
- 7 「学習者コーパスなたね」は、<https://hinoki-project.org/natane> から利用可能である。中国語母語話者とその他の言語の母語話者の作文が収録されている。
- 8 テキストには以下のような説明が記載されている(日本語訳は稿者による)。

程度的差异较大时用副词“ずっと”加以强调。
(程度の差が大きい時は副詞「ずっと」を使うと強調される。)
- 9 テキストには以下のような説明が記載されている(日本語訳は稿者による)。

两者都是“更加”的意思, 但“さらに”较郑重, 而“もっと”则是较随便的说法。
(両者はともに「更加」の意味であるが、「さらに」はより改まった言い方であり、「もっと」はよりくだけた言い方である。)
- 10 「(の) 方が」は、「体言+の方が」と「用言+方が」の両方を表す。

参 考 文 献

- 安達太郎(2001)「比較構文の全体像」県立広島女子大学編『広島女子大学国際文化学部紀要』9 pp. 1-19
- 大島潤子(1998)「日本語と中国語の比較を表す程度副詞をめぐって:『もっと』と“更”」日本女子大学国語国文学会編『国文目白』37 pp. 24-32
- 木下恭子(2001)「比較の副詞『もっと』における主観性」『国語学』52 pp. 16-29
- 候月琴(2002)「『ずっと』『さらに』『もっと』:比較性程度副詞について」日本言語文化研究会編『日本語文化研究』4 pp. 1-14

- 佐野由紀子（1998）「比較に関わる程度副詞について」『国語学』195 pp. 1-14
- 時衛国（1999）「中国語と日本語における程度副詞の対照研究：『更』『还』と〈もっと〉〈さらに〉」東京経済大学コミュニケーション学会コミュニケーション科学編集委員会編『コミュニケーション科学』10 pp. 3-26
- 章紀孝・水野義道（1984）「汉语“更”和日语“もっと”」『语言教学与研究』第一期 pp. 33-40
- 日本語教育学会編（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店
- 林菜緒子（2000）「比較構文に出現する程度副詞について：『さらに』の分析を中心に」筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース編『筑波応用言語学研究』7 pp. 1-14
- 渡辺実（1985）「比較の副詞：『もっと』を中心に」学習院大学言語共同研究所編『学習院大学言語共同研究所紀要』8 pp. 65-74
- 渡辺実（1990）「程度副詞の体系」上智大学国文学会編『上智大学国文学論集』23 pp. 1-16